

上智大学言語学会 第29回年次大会
午後の部シンポジウム講演要旨

タイトル： Case, bare phrase structure, and the lexicon of Japanese

講師：成田 広樹

要旨：

本講演は、素句構造 (bare phrase structure) の理論の中で抽象格 (abstract Case) および形態格 (morphological case) の概念が果たす役割を再考することを目的とする。

従来、抽象格の概念は、形態格の概念と区別され、名詞句 (NP、N') の生起に関する認可条件として理解されてきた。しかし、現行の素句構造理論においては、そもそも NP や N' などの投射 (projection) の概念は存在しないことになる (Collins 2002, Chomsky 2007, 2013, Narita in press など)。名詞句 (即ち、名詞または冠詞 (determiner) を最も卓越した要素として包含する句) がそれぞれ何らかの形態格を付与されることは通言語的な事実であるが、一方で「抽象格を要求する NP 投射」というような対象の存在は、素句構造理論においては決して明らかではない。実際、素句構造理論の下では、抽象格の概念は、NP などの投射の概念と同様に破棄されるべきであると主張もある (成田・福井 (開拓社、近刊) など)。

成田・福井の主張を受け入れ、抽象格の概念を UG から排除した場合、日本語などの各個別言語に見られる形態格付与の現象を我々はどのように考えればよいのだろうか。この観点から日本語の「が」「の」などの格助詞の分布を検証してみると、これらの格助詞の付与は狭義の統辞論 (narrow syntax) においてではなく、むしろ線条化 (linearization) などを含む音声化 (Spell-Out) 部門において行なわれていることが明らかとなる (Fukui & Sakai 2003 の等位接続構造に関する議論などを参照)。本講演では、このような音声化部門のみに存在する要素としての格助詞の存在理由を明らかにすることを試みる。具体的には、それらの格助詞は、本来的に線形順序を持たない集合論的对象としての素句構造に無理やり順序関係を付与していく、UG のデザインにとってはあくまで副次的であるところの音声化の過程を支える最終手段 (last resort) としての機能を持つことを主張することになる。

【講師紹介】

成田 広樹 (ナリタ・ヒロキ)

日本大学生産工学部助教。言語学博士。専門は理論言語学、統辞論。著書に *Endocentric-Structuring of Projection-free Syntax* (John Benjamins, in press) がある。